

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月26日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25249084

研究課題名(和文)近代日本の博覧会における建築展示に関する研究

研究課題名(英文)Architectural Exhibition of Expositions in Modern Japan

研究代表者

石田 潤一郎(Ishida, Junichiro)

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・教授

研究者番号：80151372

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 30,100,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果のひとつはヨーロッパ各国に現存する日本建築模型のデータベース作成である。9ヶ所の現地調査と4ヶ所のウェブ公開データの収集を行って320点の模型を確認し、データベース化した。

2点目はウィーン世界博物館所蔵の大名屋敷模型に関する詳細な調査である。3点目はイタリア・パドヴァ大学文化人類学博物館所蔵模型についての調査研究である。81点の現物を確認し、その特徴を述べ、コレクション形成の経緯を明確にした。

4点目は1910年にロンドンで開催された日英博覧会に出品された建築模型、および建築物を用いた会場装飾56種についての調査研究である。模型群を詳述し、博覧会閉会後の模型の帰趨について検証した。

研究成果の概要(英文)：The results of our research are as follows.

1.Construction of database on models of Japanese architecture in the European collection. 2. Investigation of Vienna Daimyo-residence model. 3. Investigation of Japanese architectural models in Muse di Antropologia di Pdova. 4.Study on the architectural display in Japan-British Exhibition 1910.

研究分野：建築史

キーワード：博覧会 模型 日本建築 博物館 ジャポニズム 大名屋敷

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 問題の設定

本研究は、近代日本が博覧会という機会にどのように建築を展示してきたか、という面から、日本の建築文化の海外発信、および海外の建築文化の受容の様相をさぐるうとするとともにその出発点があった。

日本は1867年のパリ万博を契機に「博覧会」という情報伝達イベントを知り、たえず参加し、みずから挙げていくことになる。われわれの研究の当初の主題は、そこにおいて、建築がどのように展示されてきたかという問題であった。研究の出発点は、博覧会における建築展示を、日本の建築文化を欧米へ伝達する方法、および海外の建築を日本に紹介する方法と考え、その役割を考察しようとするところにあった。そこでは、展示の分析を通して、近代期に日本人が日本建築をどのように理解し、どう評価していたか、一方、植民地を含む海外の建築文化をどう日本人に伝えようとしていたかをも知ることができると考えた。すなわち、文化の発信と、その前提となる文化理解の様態を把握できる好個の手がかりになると見なしたのである。ここにおいて、われわれは建築模型と実物大展示の2種類の展示形態に注目して、そこにおける文化発信・受信の様相とその成果を考察しようとした。

### (2) 国内外の研究動向

建築模型についてみるならば、日本は海外博覧会において以下のような建築模型を出展してきた。パリ万博(1867): 商家・農家、ウィーン万博(1873): 谷中天王寺五重塔、大名屋敷、神社、商家、土蔵、農家、シカゴ万博(1893): 日本家屋、内務省衛生局消毒所、日英博(1910): 台徳院霊廟、東大寺、法隆寺、唐招提寺、平等院鳳凰堂、日光東照宮、巖島神社、奈良監獄など、パナマ太平洋博(1915): 日光東照宮陽明門・法観寺五重塔・浅間神社、四天王寺金堂など。国内においても第5回内国博覧会(1903)に法起寺三重塔と法隆寺中門の1:20模型が出展されている。また実物大展示についていうならば第5回内国博覧会に北白川宮能久親王遺跡として台南の宗祠である篤慶堂が移築されているほか、復元的に新造した例として、日英博覧会勅使門、パリ万博(1900)での五重塔、カリフォルニア冬季博(1894)での数寄屋などがわれわれの視野の内であった。

建築図面・写真展示としては、ウィーン万博(1873)には伊勢神宮・出雲大社をはじめ仏殿、五重塔、十三重塔の図面、および横山松三郎の撮影による奈良、京都の古建築の写真帳が出展されている。シカゴ万博(1893)では東京集治監、パリ万博(1900)では、東京大学建築学科学生による法隆寺金堂、平等院鳳凰堂、西本願寺飛雲閣、二条城の実測図面が出品されたほか、伊藤平左衛門の「貴紳殿舎自作」図が出展されている。

これらに関する重要な成果としては、まず、

W. コールドレークが日英博覧会に出展された台徳院霊廟模型の来歴と評価について「よみがえる台徳院霊廟」で明らかにし、またウィーン万博の大名屋敷模型についても解明を進めていることが挙げられる。また畑智子によるフィラデルフィア万博での建築展示研究、また林みちこによる一連のウィーン万博研究が重要な貢献である。また柳田由紀子が「太平洋を渡った日本建築」の中でカリフォルニア冬季博(1894)のジャパニーズ・ヴィレッジ、金門博(1939)のシルク館を紹介している。なおパピリオン研究は数多いが、われわれの見るところ、パピリオンは視覚的インパクトが大きいぶん建築文化の情報を正確に伝達するという役割は期待されおらず、視野の外に置いた。

## 2. 研究の目的

われわれが見定めた研究の意義とは以下のような点にあった。

日本の建築・都市に関する研究は、近年とみに国際的な広がりを見せている。日本人研究者においても固定的な一国建築史の枠組みを超える視座が求められているのである。一方、建築博物館構想の具体化、あるいは建築アーカイブの活動への関心に現れているように、現在、建築図面・模型・写真等の二次表象物の重要性が認識されはじめ、文化資源としての価値付けが学問的にも大きな課題となっている。こうした視点に立つとき、海外において出展された(あるいは海外を参照した)建築模型や図面類、実大建築物を研究対象として、改めて捉え直すことの必要性はおのずから明らかである。しかるにそれらの中には腐朽破損が進行しているものがあり、また死蔵に近い状態に置かれているものも見受けられる。これらの保存修復及び活用の方針を立案することも緊急の課題と思われた。

## 3. 研究の方法

われわれは個別にこの問題について関心を深めていた。清水重敦は早くに、日本における建造物保存史の文脈からウィーン万博における建築模型と古建築写真帳の出展、パリ万博における東大実測図の出展に注目してきた。また石田潤一郎は松下迪生とともに、第5回内国博覧会での篤慶堂移築・展示の経緯について詳細な分析をおこなっており、また、奈良少年刑務所の調査において、新築時に模型が日英博覧会に出品された事実を知り、その意義を強調してきた。

こうしたおり、石田・日向・小野・中川はウィーン民族学博物館(現・ウィーン世界博物館)にウィーン万博出展模型群が保存されていることを知り、同地を訪れて模型群を調査するとともに同館学芸員、ウィーン工科大学の研究者と情報を交換した。これに帯同した、清水研の大学院生ゲルゲイ・ペーター・バルナがその調査に主体的にたずさわること

ととなった。

平成 25 年(2013)10 月に科研費の採択が決まった。平成 25 年度においては、1876 年開催のウィーン万博に出展された日本建築の模型に関する調査に焦点を絞った。まず 11 月にバルナが国立公文書館、東京国立博物館に所蔵されているウィーン万博関連史料を収集し、建築関係出展物の全容を製作費に至るまで解明し、収集・搬送・展示・返却の流れを把握した。また出展模型の制作者である武蔵屋鎌吉について解明を進め、遺族の協力を得て、調査を進めた。同年 12 月 16 日から 22 日まで、清水と大学院学生とがウィーン世界博物館に保存されている建築模型および工作具等の調査と文献資料の閲覧をおこなった。また同博物館およびウィーン工科大学の研究者との研究交流について協議をおこなった。平成 26 年(2014)2 月 27 日から 3 月 9 日まで、あらためてウィーン世界博物館での模型調査をおこなった。ここでは保存模型のうち、最大の大名屋敷模型について、精密な実測と写真撮影をおこない、また製作技法について分析した。帰国後、実測データに基づき、平面図・断面図の図化を進めた。

平成 26 年度前半は、25 年度に着手したウィーン万博出展の大名屋敷模型の調査とそのデータの分析に引き続き取り組んだ。まず同模型を所蔵する世界博物館の主催によって 5 月 5 日、6 日に開催された国際シンポジウムに研究分担者の清水重敦、日向進、および大学院生が出席して、これまでの調査による知見を述べ、他の研究者との討論に参加した。6 月 23 日から 6 月 27 日まで、石田・清水が大学院生 7 名とウィーン世界博物館での最終的な実測調査を進め、28 日にはウィーン工科大学とのワークショップをおこなって、理解の深化に努めた。また 11 月 15 日には所属機関予算で来日する機会を得たウィーン世界博物館のメンバーと意見交換の機会を持った。一方、ウィーン万博以外の機会にヨーロッパに出展された建築模型の所在について、オランダ、ドイツ、スイスでの調査を進め、ドレスデン、バーゼルの博物館に収蔵されている建築模型、工具について予備的調査をおこなった。

平成 27 年度はドイツ国内での日本建築模型の所在調査に取り組み、6 月 14 日から 20 日まで石田と三宅がハンブルク民俗芸術博物館、ブレーメン海外博物館、ベルリン民族学博物館、ミュンヘン五大陸博物館を訪問して調査をおこなった。そこでは個々の模型の実測をおこない、インベントリーをはじめとする資料から制作年代、制作者等を解明した。

ここまでのドイツ語圏の調査結果についての考察は東アジア建築文化会議で一端を発表した。一方、国内での調査においては、1876 年のフィラデルフィア万博の出典物について基礎調査をおこなった。また 1910 年の日英博覧会について、厳島神社模型と大島盈株による書院の実大建築に関しての調査

を進めた。

平成 28 年度はイタリアと英国とに所在する建築模型について調査すべく、まず資料の所在の解明をすすめた。その上で、イタリアについては平成 29 年 3 月 1 日から 6 日までの期間、赤松、中川、石田、バルナ他の学生によってパドヴァ大学文化人類学博物館に所蔵されている約 50 点の建築模型に関する調査を行い、実測と写真撮影、インベントリーの複写を進めた。イギリスについては、同年 3 月 25 日から 31 日までの日程で、石田、中川、三宅によって、1910 年の日英博覧会に際して出展された建築模型に関する資料を英国国立公文書館、キューガーデン史料館において収集した。

パドヴァ所在の模型の中には前年度調査したブレーメン海外博物館所蔵のものと酷似する例が見出され、あらためて日本建築模型のヨーロッパでの流通時期と経路について調査を始めている。また日英博での実物大模型建設と会期終了後の移築に関わった北村春吉が 1911 年ドレスデン国際衛生博覧会、1915 年パナマ万博のそれぞれの日本館の建設にも携わっていることが判明し、同人の事績について調査を進めた。

平成 29 年度には、デンマークについてはコペンハーゲン市内の国立博物館の協力を仰ぎ、同館所蔵の模型類について、9 月 5 日から 11 日までの期間、実測調査を行った。またベルギーについては、研究協力者である日向進が、10 月 23 日から 31 日までの期間、リエージュ大学極東博物館において情報の収集を進めた。

一方、われわれの研究グループとは別個に、フランスでの事例の調査を行った西田雅嗣教授と情報の共有を進めた。

平成 30 年 3 月にいって、ゲルゲイ・ペーター・バルナは自身が中心となった研究の成果について、清水の指導の下、考察を加え、博士論文としてまとめた。

#### 4. 研究成果

研究の最終的な成果として、報告書をまとめている。その概要をここに記す。

バルナは、本研究のもっとも中心的な成果であるヨーロッパ各国に現存する日本建築模型のコレクションのデータベースをまとめた。すなわち、資料編として掲載しているもので、9ヶ所の現地調査と4ヶ所のウェブ公開データの収集を行い、その結果、320点の模型を確認し、これをデータベース化したものである。

海外に現存する模型は、博覧会に出品されたものは10点のみで、残りは個人収集によって所蔵されたものであること、江戸後期のものが85点、明治初期のものが15点、明治以後のものが104点あるということがわかった。模型の調査を踏まえて、1.一般建築模型、2.宗教建築模型、3.建築的な特徴がデフォルメされて、特別な焦点のある模型、4.建

築の要素をただ背景として利用し、別の目的のある模型、5. 建築の要素を引用し、単一の側面を表現する模型、6. 建築技術の模型・サンプル、7. 建築の形態を持っている装飾、8. 建築の形態を持っている信仰物、9. ヨーロッパで作られた日本建築の模型、の9つに区分することができた。

また、バルナ論文では、ヨーロッパに現存する日本建築模型の中で最大規模かつ最も精巧な仕様で作成されているウィーン世界博物館所蔵の大名屋敷模型につき、詳細調査と分析を行っている。調査の結果、構造技法、細部意匠、用材に、実際の建物を細部に至るまで再現しようとする徹底したこだわりが認められた。その一方で、模型全体の形状には省略、デフォルメ等が見られ、形の正確さよりも建築物としての全体的な特性を表現しようとしていることが指摘できる。建築の形の再現よりも、建築の本質を制作者が解釈し、この模型で表現しようとしたもの、と読み解いている。また、模型制作者についても史料から詳しく分析し、新たな知見を得ている。

以上の考察の結果をまとめ、結論としている。日本には19世紀以前にすでに模型を愛でる文化が存在しており、ヨーロッパに渡った模型群の一部はこうした模型文化を切り取った形のものであった。その一方で、日本建築の情報を伝えるべく新たに造られた模型も確認されたが、それも今日我々が認識する建築の二次的製作物としての模型というよりは、模型そのものに物としての価値が込められた、いわば小さな建築として造られたものが多く見られた。ヨーロッパではさらに、こうした情報を基に実物大の日本建築が造られることがあり、建築伝播のあり方は、当初想定したモデルよりもさらに重層的なコード化、脱コード化がなされていたことがうかがえるとする。

赤松論文は、イタリア・パドヴァ大学文化人類学博物館に所蔵された日本建築の模型について報告するものである。81点の現物を確認し、材質と内容から6タイプに分類して、その特徴を述べている。同時にコレクションが形成される経緯を明確にした。このコレクションはヴェネツィアに邸宅を構えたバルディ伯爵が1889年に日本で収集した物品の一部である。収集はハインリヒ・フォン・シーボルトの指導に基づいておこなわれた。家屋模型の多くは正確な再現とはいえず、外国人が思い描く日本のイメージに合致するように選ばれた、あるいは制作されたものであることを指摘している。

三宅論文は1910年に英国ロンドンで開催された日英博覧会に出品された建築模型、および建築物を用いた会場装飾56種について報告するものである。日英博での模型展示の目的と設置場所は多岐にわたり、出品者も31団体と多数に及ぶ。論文では、模型群を出品企画者によって、日英博覧会事務局、中

央官庁、地方庁、出品団体、その他の5パターンに分け、さらにそれぞれを細分化して詳述する。加えて、博覧会閉会後の模型の帰趨について検証し、また京都出品協会の技術者として勅使門の建設と移築保存に大きな役割を果たした北村春吉を紹介する。こうした細部の解明の積み重ねによって、出品企画者、当該建築物の関係者、模型製作者が、模型の意味や役割に対して、さまざまな認識を有していたことを明確にしている。

西田論文は、日英博覧会に京都出品協会が出展した「京都館」についての報告である。京都館の貴賓休憩所は日英博終了後、フランス・リヨンのギメ博物館に移築され、「鶴の間」として現存する。本研究とは別個にその調査を進めていた西田に、特にその知見の寄稿を依頼したものである。

論文では、一般には西本願寺対面所書院「鴻の間」の忠実な再現とされてきた当建築物が、実は高台寺をはじめとする桃山期のさまざまな遺構からの集積物であることを示している。また移築に際しての日本側の言説、移築後の改変の経過を明らかにして、日本が建築模型にどのような価値を盛ろうとしたか、それがどのように受け取られたかが示される際だった局面を明確にした。

こうしたモノグラフを通じて、近世から近代にかけての日本における建築模型の諸相が具体的に浮かび上がり、その予想を超えた広がりが明らかになった。それは日本国内における建築模型の受容と制作それぞれの多様さを示すことにもなった。こうした重層的な建築模型の世界に対して、ヨーロッパがさらに自分たちの眼差しに基づく読解と評価を加え、それが再び日本へ反射するという様相が明確になった。この点において、本研究は橋頭堡としての役割を果たしたと自負するものである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

高妻洋成、木質文化財の保存と修復の科学の展望、木材学会誌、査読無、61(3)、2015、239-242

DOI:10.2488/jwrs.61.238

清水重敦、平城宮第一次大極殿と復元の可能性、建築雑誌、査読無、131、2016、44-45

[学会発表](計 2件)

G.P. BARNA, S. SHIMIZU, J. ISHIDA, Little Architecture: the role of early-modern models in the international recognition of Japanese architecture, International Conference on East Asian Architectural Culture 2015, Nov. 11, 2015, Guanju, KOREA

G.P. BARNA, S. SHIMIZU, J. ISHIDA, C. Li,

International Transmission of Architectural Culture with Focus on the Role of Architectural Models, International Conference on East Asian Architectural Culture 2017, 2017-10-15, 2017, Tianjin, CHINA

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

石田 潤一郎 (ISHIDA, Junichiro)  
京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・  
教授  
研究者番号：80151372

### (2) 研究分担者

清水 重敦 (SHIMUZU Shigeatsu)  
京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・  
准教授  
研究者番号：40321624

中川 理 (NAKAGAWA Osamu)  
京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・  
教授  
研究者番号：60212081

小野 芳朗 (ONO Yoshiro)  
京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・  
教授  
研究者番号：50152541

赤松 加寿江 (AKAMATSU Kazue)  
京都工芸繊維大学・グローバルエクセレン  
ス・講師

研究者番号：10532872

三宅 拓也 (MIYAKE Takuya)  
京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・  
助教  
研究者番号：40721361

日向 進 (HYUGA Susumu)  
京都美術工芸大学・工芸学部・教授  
研究者番号：60111994

高妻洋成 (KOUZUMA Yousei)  
奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター・  
保存修復科学研究室長  
研究者番号：80234699

松下迪生 (MATSUSHITA Michio)  
奈良文化財研究所・発掘調査部・アソシエ  
イトフェロー  
研究者番号：50638880

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

バルナ ゲルゲリー・ペーター (BARNA,  
Gergely Peter)